

## アメリカ高等教育事情について

筑波技術大学理事・副学長

森澤良水

**要旨：** 本学の四年制化後の諸課題である「新学生寄宿舎建設問題」「大学院設置問題」「法人化後の経営問題」などに参考となる情報収集などを行うため、平成18年3月21日から3月26日の6日間にわたって、本学の前身の筑波技術短期大学を設立するのに当たってモデルとしたニューヨーク市立大学バルークカレッジと本学の大学間交流協定校でもある私立ロチェスター工科大学内に設置されている国立聾工科大学を訪問し、調査などを行った。

**キーワード：** 一般大学における視・聴覚障害者支援、大学院、収支問題、学生寄宿舎

### 1. ニューヨーク市立大学バルークカレッジ (Baruch College, The City University New York)

最初に訪問したニューヨーク市立大学バルークカレッジは、マンハッタンの地下鉄「23St. Park Ave. 駅」を下車して歩いて、5分程の所にある。

ニューヨーク市立大学には、11校の4年制大学（バルークカレッジはその一つ）と6校のコミュニティ・カレッジと2校の大学院（博士課程）がある。それぞれの学校は、例えば新しい学部を創る際には、本部に申請して許可を得ないといけない。（このことにより実質的に調整している。）

このニューヨーク市立大学は、日本とも関係があり、幕末日本の初代米国総領事を勤めたハリスが移民や貧民をも含む全てのニューヨーク市民を対象とし設立した無料の学校に淵源する。この無料の学校が、後年ニューヨーク市立大学（その一つのCity College）へと発展した。この伝統から同大学は、現在でも比較的授業料が安くなっている。この大学では、主として一般大学における障害学生の受け入れ状況について伺った。

#### 1.1 一般大学における障害者支援について

対応者

Barbara Sirois (Director Office of Services for Students with Disabilities)

Sharon Lerner (Director of Student Affairs)：大学院の担当者  
アメリカの大学では、学生がどういうことに関心があるのかを最も重要視し、職業を決め付けない。学生が希望して入学したところで、大学側が障害を持つ学生にいかにして支援していくかを考える。

バルークカレッジに入学してくる障害をかかえた学生は、医学的にどういう状況なのか、どういう問題が入学後起こりうるかを事前に教授に相談してもらおう。（教授が相談にのるためのマニュアルあり）そして、大学側がどうい

う援助ができるかをお話する。（過去目の不自由な学生で支援を頼んだことのない学生もいる。それは、本人が必要ないという理由で）

米国の金融の中心であるウォール街にも近いこともあり、バルーク校はビジネスに強みを持った大学で修士課程まである。博士課程は、ニューヨーク市立大学全体で一本となっている。学部学生は14000人おり、その内障害学生は301人（視覚障害者33名、聴覚障害者7名、その他の障害者261名）、大学院は4000名の学生のうち目に障害のある学生が2名、その他の障害が6名（うち耳の全く聞こえない学生が1人）、何年か前に重複障害の学生もいた。大学院では、過去目が不自由で博士号を取り、大学の教授になった人が1人いる。

障害学生が教室でテストを受ける場合、一般の学生と違い、特別の時間（延長時間）、特別のソフトなどで行っている。

図書館員にも障害学生にきちんと対応するよう指導している。

例えば、コンピュータールームなどは、健常学生と同じ部屋で障害学生用のコンピューターがあわせて置かれている。この大学に附属する成人学級のための視覚障害者コンピューターセンター（Computer Center for Visually Impaired People, 略称「CCVIP」）のように視覚障害者用の特別の部屋はない。

#### 1.2 視覚障害者コンピューターセンター (CCVIP)

対応者

Judith Gerber (Manager Educational & User Services) 外1人

このセンターは、学部や大学院の視覚障害学生の施設ではなく、成人学級に参加している視覚障害者の学習支援施設である。

## 2. 国立聾工科大学 (National Technical Institute for the Deaf, 略称「NTID」)

次に訪問したのがNTIDで、この大学は、ニューヨーク州内にあるとはいっても、カナダと国境を接する北のオンタリオ湖のほとりにある。1829年に設立された私立のロチェスター工科大学 (Rochester Institute of Technology, 略称「RIT」) の中に存在する国立大学のような存在で日本の設置形態とは大きく異なる。したがって、NTIDはRITの一学部のような位置づけである。約40年前の1965年に設置され、教養のギャロデット大学と違い、「手に職を」という工学系の大学で本学の直接モデルとなった学校である。ここでは、本学のこれからの課題である「大学院の問題」「新学生寄宿舎の問題」や法人化後の経営に参考となる「収支問題」などについて調査を行った。

### 2.1 大学院について

対応者

Dr. Gerald Bateman (Chairperson, Master of Science Program in Secondary Education of Students who are Deaf or Hard of Hearing, 略称「MSSE」)

NTIDは1965年にできたが、MSSEができたのは13年前。

NTIDにはMSSEという聴覚障害児の中等教育の先生になるための修士課程がある。1学年30人で、2年間の修学期間、毎年30人のうち約10人がNTIDの出身者、ギャロデットの出身者は2~3人、他の大学から2~3人、その他健常者も進学できる。

NTIDの基本在籍年数2~5年(数学、英語、基礎のコースをとらないといけない。卒業単位には加算されない。)NTIDからMSSEには直接進学できず、一旦RITに進学してそれからMSSEに入学する。NTIDとRITを合わせて5~6年在籍(この年数と上記の基本在籍年数の差がRITの在学期間)してMSSEに進学してくる。RITだけの人は4~5年で卒業してMSSEに入学してくる。

MSSEでは、2年の間にコース取得(1年目50単位、2年目44単位)

専門は2つ

リサーチのプロジェクトに参加(論文ではない。)

カリキュラムの作成、文献の研究、グラントをとるための申し込み、先生の前で発表により修士号を取得

ニューヨーク州の教員免許をとるためには、4種類の試験(一般教養、教授法の理論、専門(数学等)、聴覚障害者)に合格しないとけない。

上記試験に合格することによりニューヨーク州では、雇いが確保できる。

他の州は要件がそれぞれ違うのでそれに合わせないと

けない。

MSSE以外の専門分野の大学院に進みたい学生は、RITの大学院に進学することとなる。

RITの大学院の5割を留学生が占めている。(インド、中国など)

### 2.2 収支問題について

対応者

Michael S. Serve (Director, Financial Planning & Budgeting)

Donald H. Beil (Executive Assistant for Government and Business Affairs to the VP/Dean)

NTID設置の際の合意事項

「RITに負担をかけない。」

NTIDの収入構造

80%が政府からの助成金(政府からRITに入り、トンネルでNTIDに配分される。5年位前、連邦政府からの助成金が減るのではないかとの話あった。理由:政府の予算逼迫、しかし、実際は減っていないが、増加額が不十分で、年率3~5%のインフレで支出増が上回っている。例えば、教職員給料増、エネルギー価格増)

残りの20%のうち1位が学費(これが20%のうちの90%を占める。)、2位が寮からの収入、3位が教授陣が外部の助成金をうる。

NTIDの学生の授業料は、RITの学生のそれより安い。(RITの学生の授業料の約3分の1)

収入増加策

学費の値上げ(7%)

NTIDの経費削減策

教職員は、10年前630人いたが、現在530人(230人教員、300人職員)である。つまり100人の削減を行った。(ちなみにRITは職員減は行っていない。)

これからは、職員を増やしたいと考えている。(職員は、給料が安いので改善する。手話通訳者を増やす。字幕入力者を増やす。)

RITの収入構造

80%が授業料(この割合は、他の大学に比べて高い。授業料の額は他の工学系あるいは技術系の大学と比べて平均的のところ)

残りの20%のうち1位が寄付金(個人、企業)2位が助成金(政府、企業:特別の目的のあるグラント、例えば「通訳の教育開発のクラスを作るとか(日本の寄付講座のようなものか?)」これは、助成した企業が利益を得るわけではない。一般にとって利益がある。)3位が契約(企業からの委託研究「例えば、企業から製造工程の改善の委託を受け、大学が出した成果を購入する。」)

収入増加策

学費の値上げ (5%)

助成金 (グラント) を増やす。

教授の上の人は、給料が高いため助成金を積極的に取ってきてもらう。

助成金の中から給料支払われる。

オーバーヘッド部分が 40% ある。

これを RIT3 分の 1、NTID3 分の 2 の割合で分ける。(ただし、経費は別にある。例えば、研究者のいる場所、コンピュータ経費、会計に要する経費)、この経費は、何に使うかの制約なし。

寄付金を増やす。

RIT の寄付金目標 3 億ドル

学部ごとに分けて額を満たす責任あり

NTID の受け持分 2650 万ドル (既に目標を達成した。)

開発 (Development) 事務局が寄付金を得る責任部署

3 人の職員がいる。(Director, Assistant, Secretary)

裕福な人を探す。(個人、聴覚障害者、聴覚障害学生の両親・祖父母)

面接の予約をとる。

ハーウィツ副学長 (注: RIT の位置づけからすると「副学長」なり「学部長」となるが、実質 NTID の「学長」と局長が全国の寄付してくれそうな者に会いに行く。

大企業やファミリーの財団は、それぞれの興味エリアに出している。学生に与えてくれる奨学金は、61 種類ある。

寄付金の 90 ~ 95% が学生への奨学金に当てられる。したがって学費を上げることができる。

次に建設費に使う。

連邦政府や企業への説明

「かわいそうな聴覚障害学生にお金をください。」とは言わない。

学位を得て、学生達が社会の生産的役割を果たす。

人生に投資、将来税金を払う。(返す額が、投資額より多い。)

学位を持ってない学生より、政府に頼る依存度が低くなる。

チャリティをお願いしている訳ではない。

投資、国全体の投資

知財戦略の現状について

開発にかかったお金が収入より多い。

大きな収入になると考えていない。

経費 (マーケティング費用、弁護士費用、ロイヤリティ収入を個人と学校で分ける。) がかかる。

RIT 全体で 2 ~ 5 万ドル位を分けている。NTID は 1 ~ 2 万ドルを受け取っている。

2.3 学生寄宿舍について

対応者

Wendy Hagele-Stapf (Assistant Director、Residence Life Dormitory Tour)

NTID の学生寄宿舍の建物を作ったのは国、運営は RIT である。

学生寄宿舍の建物の入口には、防犯用のカメラがある。

各階には、カメラなし。(プライバシー保護のため)

エレベーターに乗るのにカードが必要である。

学生の部屋の入口は普通の鍵 (カードを使うことは視覚に入れていなかった。)

部屋は、原則 1 部屋 2 人 × 3 部屋 = 6 人が単位、中央に共用のトイレとシャワーがある。

2 人部屋のベッドは、2 階建てにしたり、横においたり可動式になっている。また、高さも変えられる。

押入れのドアはなし。カーテンをつけている人もいる。

小タンスを押入れの下に入れたり、書類入れを机の下に置いたり可動式にしてスペースを確保しやすいようにしている。

電灯を大きくし、窓も広く、採光に工夫をしている。

窓には、コンピュータ・モニターが見やすいようにブラインドがある。

「ドアベル」や「ファイヤー・ランプ」は、窓側の見やすい場所に設置している。

ウォーター・スプリンクラーが設置されている。

各階に学生の寮監がおり、彼は、2 人部屋を 1 人で使用している。

寮監の部屋には、マスター・キーがあり、鍵を失くしたり、鍵を持たずに部屋を閉めた学生が寮監に借りに来る。掃除機も寮監の部屋にあり、学生が借りに来る。

視覚障害学生の部屋は、危ないので、タオル掛けなし。

ドアノブは、筋ジストロフィーの学生でも開けやすいように、上から押せばいいようになっている。

共用施設のラウンジのプロジェクター (映写機) は、コンピュータがつなげるようになっている。また、ラウンジ内の家具は聴覚障害者に配慮して動かせるようになっている。

風呂、シャワーなど公共で使っている場所は、大学で清掃している。

電話回線は、電話用一つとコンピュータ用一つの二つあるが、学生は大概携帯を使用しているので、1 回線は今使っていない。

企業からテレビ電話の寄付あり。廊下の天井には、防音用の網が設置されている。

(理由：NTIDの学生寄宿舍は、聴覚障害者と健常者の混住寄宿舍であるので耳の聞こえる学生が騒がしく感じるといけないので)

ゴミ捨て場は、リサイクルできるように分別されている。

リサイクルゴミ：カンを返すとお金が戻ってくるシステム

ラウンジ兼軽食用の炊事場には、電子レンジしか置いてない。

(理由：ガス・電気は、過去火事未遂があったので)

ラウンジ兼炊事場の鍵は学生の鍵でも開くようになっている。

このラウンジには、ソファと机があり、勉強もできるようになっている。

ラウンジのカラーは階ごとに違えてある。

別の階の人は使えない。

学生食堂は、6箇所あり、学生は基本的には、そこで食事をする。量は日本人からすると多い、寿司もある。

売店もある。

RITの道路の外に大学が敷地を所有しており、そこにレストランや売店など大学街を作る構想もあり。

色んな障害者用に色んなタイプの別の部屋もあり。

車椅子使用の学生用の大きい部屋もあり。

必要があれば、隣にケアの職員がいる部屋もあり。

1年生は、基本的に寮に住む。(理由：安くすむ。交流ができる。)

上級生は、大学が所有するアパートメント(家具付きと家具無があり)に住むこともあり。

廊下には、緊急時に押せる「青ランプ」あり。ここは警備室と連動している。

ランドリー

洗濯物をたたむことができるようテーブルあり。

車椅子用の洗濯機や乾燥機もあり。

洗濯機はカードで支払いを済ませる。

1階の入り口付近に面会室があったが、携帯電話が普及して必要性がなくなったので現在はインフォメーションデスクに変更している。

担当者の見解として、交流を考えれば、個室より相部

屋がいいとのこと。

以前は、聴覚障害学生だけで学生寄宿舍を構成していたこともあったが、それよりも健常学生との混住にした現在の方が問題の発生する率が低い。

(学生寄宿舍建設に当たっての留意点)

対応者

Albert S. Smith (Assistant Vice President ,College Operations)

Karey Pine (manager ,Student Life Team)

Mary Niedermaier (Housing Operations)

1、外の騒音をどれだけ抑えるようにするか。

(エアダクトの騒音、空気のノイズ：対策 パイプにカバーを付ける。)

2、学生によって作られた騒音をいかに防ぐか。(共同して住んでいるので)

(TV、ステレオの騒音)

3、建物の振動をいかに抑えるか。(暖房等の時)

対策：錘を付けて振動を抑える。

4、壁を厚くする。

前の壁は薄く、穴があきやすかったので、改築の際厚くした。

5、掲示板を設置する。

学生が情報を得やすいように

6、無線ランの電話を妨害しないような建物

7、通路の幅を広くする。

(リュックをかついだり、手話が大きくなると邪魔)

8、柱は、コミュニケーションをさえぎらないように設置する。

(聞こえない学生の視点からラウンジ等を作る。)

9、太陽の光を採り入れる。

(聴覚障害者は、視覚的刺激に敏感。統一された色を使う。)

10、アメリカの法律で「聞こえない学生も分かるように」となっている。

このことは、各障害を持った学生にも言える。

(ドアベル・非常ベルの設置、階段に行くのが学生に分かりやすいように)

11、学生寄宿舍は低層が望ましい。

高層だと問題が起きることが多い。

## **Current situation of American Higher Education**

Morisawa Yoshimi

Tsukuba University of Technology Executive Vice President

**Abstract:** To collect information on the issues which our university has been faced since it turned into four year university, the six days study visit was carried from March 21 to 26, 2006. In this visit, the problems on constructing new dormitory, establishment of graduate school, and management of incorporated university was dealt. The institutions I visited were following: Baruch College, The City University New York (the model of Tsukuba College of Technology which is the predecessor of our university), and National Technical Institute for the Deaf (the institution which signed sister institution agreement with our university) attached in the private school Rochester Institute of Technology.

**Keywords:** Support service for the students with hearing and visually impaired, Graduate School, Balance of payments Problem, Dormitory

